

## 性的指向に関するマイノリティである若者の恋愛の理想と現実 —BLに描かれる関係性と親が恋愛観に与える影響—

林 佑治

恋愛は出会い方によって2つに分けられる。恋愛を前提としていない出会いのロマンティックな恋愛と、恋愛を前提とした出会いのリアリスティックな恋愛である。異性愛主義の社会では異性愛者の恋愛はロマンティックな恋愛とリアリスティックな恋愛とどちらの可能性も存在する。しかし、純粋な異性愛者ではない者の恋愛はロマンティックな恋愛とリアリスティックな恋愛とのそれぞれの可能性の間に大きな差が存在すると考えられる。

Laner (1977) は同様の観念を前提として調査を行ったが、結果的には異性愛者と同性愛者の間で恋愛の継続性への期待に差がないことが実証されている。しかし、この研究は古く国情も異なるため日本での現状を明らかにすることを目的としている。

本研究では性的指向に関するマイノリティの若者に焦点を当て彼らの恋愛の様子を明らかにするためにインタビューによる質的調査の手法を採った。また、それらをより鮮明にするために異性愛者にもインタビューを行った。質問項目は恋愛観や恋愛経験、ライフストーリーなどである。性的指向に関するマイノリティとは異性愛規範の強い社会において非異性愛として自身の性的指向を認識する者、具体的には同性愛や両性愛、全性愛など、またそれらと異性愛のグラデーションとして自身の性的指向を認識している者のことである。

13名(男:女=7:6)の調査対象者のうち異性愛者は5名(4:1)、性的嗜好に関するマイノリティは8名(3:5)であった。性的指向は対象者の自認による。

インタビューで得られた語りから、恋人を強く欲している人は恋愛を前提としたような出会いの場を積極的に利用している様子が伺える。偶然の出会いから発展する恋愛を理想としている者がいる一方で、恋愛を前提とした出会いを求めマッチングアプリやクラブイベントなどを利用している者もいる。典型的な例を挙げる。Bさんの性的指向は「ゲイとバイの間」である。Bさんは腐男子でありBLを愛好している。BLにはノンケ(異性愛者)とのロマンティックな恋愛が描かれており、Bさんにとって「ノンケとの恋愛はロマン」だという。BLはフィクションであるとしながらも現実と混淆することがあり、好きになったのはノンケばかりであり、無理とわかっていながらも奇跡を頼み「ノンケに告白してしまう」ことがあるという。Bさんは恋愛における理想の関係を一緒にいて安心するものであるという。Bさんの両親は恋愛結婚であり、現在も2人で旅行に行く仲だという。Bさんは両親の様子を見て恋愛に対する強い願望を持ち、憧れがあると語っている。

性的指向に関するマイノリティにとってロマンティックな恋愛は異性愛者との恋愛であることが多く、このような性的指向が合致しない相手との恋愛を夢想しその不可能性へ挑戦している人には、自身の恋愛観に対するBLに描かれる関係性や身近な異性愛(者)のモデルである両親の関係性の強い影響があると考えられる。

(指導教員 後藤嘉宏)